

NPO 法人住まいのホームドクター／設計者の会  
460-0017 名古屋市中区松原 1-17-6 朝日軒ビル3階

# HD ニュース

No. 46  
2017. 3. 15

今後の予定／於：事務所会議室

4月6日(木)18:30～ 役員会

4月18日(火)18:00～ 相談委員会

4月18日(火)19:00～ 研修会

4月20日(木)19:00～ 木造技術研究会

事務所は移転しました。新住所：左記参照

電話：052-684-4162 FAX：052-684-4164

## 青龍殿と大舞台と光庵

副理事長 森 登

先日、当方が所属している まちづくり系の団体が開催した、日帰り研修見学旅行に参加しました。行先は京都でした。見学ルートは京都東山にある青蓮院（青龍殿・大舞台）→宝ヶ池で昼食→北区大徳寺→姉小路通り。24名の参加で小型マイクロバスでした。参加費用は昼食込みで7500円。良く晴れて、そこそこの人数ですから、気楽ですね（ちなみに、当会でも4月9日・10日で毎年恒例の宿泊見学旅行が組まれています。皆さんは参加されますか？是非参加してください、本当に面白いですよ!!!）。

最初に見学した青蓮院（青龍殿・大舞台）について、面白かったので紹介します（皆さんも時間があったら見学に行ってください）。



青蓮院は、三千院・妙法院と共に、天台宗の門跡寺院で、多くの法親王・入道親王が住職を務めてきた、格式ある寺院です。江戸時代には仮御所にもなったことがあるとのことでした。青龍殿とはそこにある大護摩堂で、国宝・青不動明王を奥殿に安置しています。もともと大日本武徳会の「武徳殿」として大正2年に北野天満宮前に建立されましたが、老朽化に伴い平成10年に解体したものを、平成21年に青蓮院が「青龍殿」として、東山將軍塚に移築再建し、平成26年10月に完成したとのこと。 「武徳」ということだけあって、中央の板張りの

道場空間は、天から光が降りてきて、まさに「武道を究めている」感が演出されています。床をトンと踏むと、「ドン」と床下（？空間でしょうか？）で共鳴します。当時「武徳」を究めようとしている者にすれば、「上手くなったような」気になれたんでしょうね。暗さと明るさとのコントラスト・バランスも上手くいっていて、空間の演出を図っているということです。面白い大きな空間になっていると思いました。

青龍殿の東を回り込むと、大舞台に出ます。広さは、清水寺の舞台の4.6倍の広さとのこと。清水の舞台が改修にかかりますから、こちらが注目されるでしょう。上手に商売やるな～と、商売下手な私は、ひたすら感心しました。大舞台からは京都市内が手に取るように一望（「売り」ですから当たり前です）できましたが、惜しまれるのは春・秋ではなかったことです。外国人にはウケが良いでしょうね……。



大舞台は床が木造で、「本来は裸足で歩き回るコンセプトでは……」と感じました。それくらい気持ちがいい!!!床組みは木造トラスです。特に先端は8～9mのトラスの片持梁（新築当初）だったようです。青龍殿の脇に構造模型が陳列されていましたが、「見事・軽快で美しい」。清水の舞台を意識して、現代版の「舞台」ということでしょうか、部材もス

リムです。貫構造とトラス構造。大工棟梁の経験値と構造計算。計算をバッチリやって、デイトールも完璧だった。しかし、思うようにはならなかった。スケベ根性丸出しで、床下に降りて確認すると、先端が垂れたのでしょうか、支柱が立っていました・・・(床下を見上げるような観光スポットではないから、結果オーライでしょうけど)。なんか違うよな～～。



大舞台には吉岡徳仁によるガラスの茶室「光庵」が建てられていました。釜・茶道具以外、建築は床・壁・屋根、全てガラス。待合の腰掛もガラス。大舞台で京都市内の景観を十分堪能した後、踊り口から茶室内へ上がる、という設定です。最初にドーンと「いいところ」を見せてしまうのは、日本流ではない？ちょっと違うのでは？ 主人のお点前と京都の遠望風景が「一つの絵になる」ようになっています

が、全面ガラスだから当然そのようになってしまいます・・・。ガラス屋根と壁は離れていて、外と同じ空気・室温です。茶室の中にはガラス製の腰掛（普通は無い？）が設えてありました・・・。茶室の「カタチ」をしているものの、チョッと違う・・・。何でこんなの造ったの???

疑問が解けました、つまり、京都に来られた外国の方々を対象とした茶室だと思います。日本の「自然に対する空気感・捉え方」と、それにより作られる空間の「ケイシキ」を、判り易く海外の方々にお伝えする為に作られた茶室なのでしょう。お茶室本来の目的・意味を飛び越えて、よその国の人に日本を理解してもらう「ツール」としての「チャシツ」ということでしょうか。最初にドーンと京都景観を見せた、更に座れない方々が多いから腰掛を設えた、腰掛は風紋の影ができるようなカタチをしているなど等、なるほど。

日本の「座して一期一会に浸る」割には、周囲の要素が喧しすぎる、ウルサイ、目障り、集中できない、説明過多、青龍殿～大舞台～光庵を順次観ることで、「今の日本ってどういう国？」を理解してもらうために「作られた茶室」＝「ツール」でした。

## 熊本地震現況視察を終えて――②阿蘇神社、熊本城

理事長 滝井幹夫

次の目的地は阿蘇神社です。車窓から見る熊本市内の幹線道路沿いの地震被害は目立たないが、垣間見える裏側付近にはブルーシートが散見され、復旧途上の様子が推察出来ました。阿蘇山の山裾に差し掛かると雪が舞い、広大なカルデラ台地の一面を走り抜け阿蘇神社に到着。約2300年の歴史があり、「肥後一の宮」と呼ばれて、熊本県下を始め多くの人々の信仰を集めているとのこと。

既に倒壊建物は、跡形も無くなっていましたが、今回の地震で日本三大楼門の一つ「楼門」倒壊を含めて、多くの国指定重要文化財が倒壊等の被害を受け、目立たない建物にも被害があり完全復旧に10年、費用に約20億円がかかる予想で、調査が進めば更に増える可能性があとのことでした。

1日目の視察を終えて宿泊先へ向かうため、阿蘇

山のカルデラ台地を走り、内牧温泉阿蘇プラザホテルに到着しました。日曜日なのに客が少なく半ば貸し切り状態で入浴、食事なども至極のんびりしたものでした。

2日目はメインの熊本城。辺り一面銀世界の中を阿蘇山カルデラ台地から下り熊本城へ到着したが、寒く手足が凍えました。





同行市会議員の尽力で、熊本市議会事務局の平野氏と、熊本城総合事務所所長の河田氏案内での視察だったが、建物直近や内部視察は、残念ながら叶いませんでした。至る所の石垣、塀が崩れ、地面のひび割れが残り大天守の鯪・瓦が落下、各櫓等の崩壊や破損、堀内には落下したままの石や土砂が残っていました。崩壊防止のフレコンパックやネット・シートの設置、復旧の為にナンバリングされた石の置き場、重要文化財としての復元を目指す広大な木材仮置き場と保存庫、山と積まれた土砂の山があちこちに残り、復旧の困難さが推測されました。修復には10年以上と現段階概算で約634億円が必要で、石垣等の外構修復が約425億円を占めると説明を受けました。

今、名古屋城天守閣の木造再建論議がされていますが、石垣等の外構補強・補修を後回しにしたまま大地震が発生した時、外構等被害の大きさが危惧されます。



## 結びにかえて

益城町の木造住宅被害に関する日本建築学会調査を基に、NHK朝イチ「あなたの家は大丈夫」が以下の内容で放映されました。(パーセントは、被害率です)

1981年以前	旧基準	95%
2000年以前	新耐震	80%
2000年以降	最新基準	40%

改定に順じて耐震性能の向上は明らかであるが、問題は最新基準でも40%の被害があったということです。

その原因は、地盤状況、施工精度等の多くの要因が有って単純な比較は危険だが、一つの指標として重要です。

約10年前に新築された2戸の木造住宅被害を比較した結果、被害の殆ど無かった家(A)と倒壊した家(B)の大きな違いは柱と耐力壁の直下率の大小であったとのことでした。

(A) 柱—58.7%

壁 X 方向—93.2% Y 方向—92%

(B) 柱—26.4%

壁 X 方向—12.5% Y 方向—14.3%

従来、木造住宅は3尺(91cm)を基準モジュールとして造られて来ましたが、それ以外の寸法単位で造る場合を「間崩れ」と呼び、上下階の柱、壁の位置が揃わず、耐震性能の劣る事を構造知識のある建築士は以前から知っていました。

「素人にも出来る間取りの設計」等々の雑誌普及が家造りを身近とした半面、それを基にあまり専門的な吟味をしないで設計が行われるケース、住宅会社の標準プランにオプションを加味しただけで構造を理解できない営業マン、構造を理解していない建築士の存在等が耐震性能の低い家を生んで来たと考えます。

また、建物内の車庫や、1階に広いLDKや吹き抜けを設け、2階に個室を多く設ける最近の傾向は、1階の耐力壁が少なくなり易く、柱や壁が繋がらないことを生み、直下率を低くします。

基本に立ち返ることになりますが、家を造る場合はデザインだけでなく構造や設備を含めた、総合的な専門知識を有する建築士(設計者)を選ぶことで安全が確保される。と、いうことを如何にしたら知ってもらえるか。悩ましいところです。



